倉本總さんに聞く

写真は日本経済新聞 2015 年 1 月 10 日夕刊「風化に抗う　倉本總さんに聞く」である。

風化に抗う　倉本 聰さんに聞く

豊かさが曇らせる未来

喪失に寄り添い前へ

福島と向き合う舞台

胸を打つリアルな言葉

脚本家・劇作家・演出家の倉本總さんは、1977 年北海道・富良野に移住し、富良野塾をつくり活動を続けてきた。福島に寄り添って風化に抗(あらが)いたい、と思いを語る。東日本大震災と福島の原発事故の記憶や教訓を、しっかりと心に刻むべきだという。

「岩が砕けて石になり、石が砕けて砂になって、やがて砂が塵になり、風に乗って飛散して消え去る。それが本来の意味の風化なんです。気が遠くなるような長い歳月をかけて起こるのです」「ところが東日本大震災の記憶は発生から 4 年も経たないのに風化が始まっている。原発事故も廃炉や核廃棄物の処理をはじめ難題の解決に向けた道筋が見えないまま、国は再稼働に舵を切り始めています」

「犠牲になった方々や遺族のみなさん、故郷を捨てざるをえなくなった人たちを忘れてはいけない。悲しみや苦しみを乗り越えようとして頑張っている人々を応援しないといけないと思います」　復興に尽力する人たちに敬意を表する一方で、震災と原発事故を一緒にして復興と呼ぶのはおかしいという。「地震と津波は地殻変動が引き起こした天災で、原発事故は人災です。両方を並べて『復興』と称してはいけない。原発事故の被災者には復興と並行して『賠償』をきちんとしなければいけません。僕は地震国の日本に原発を造ったこと自体が人災だと考えています。原発というリスクを背負いながら贅沢な生活を続けるのか、不便を忍んでも 70 年ごろの暮らしに戻って原発をなくすのか。日本人は真剣に選択しなくてはいけないと思っています」

自身が脚本を書き、演出し、富良野塾出身者ら富良野 GROUP が出演する舞台劇「夜想曲―ノクターン」が、10 日から富良野市を皮切りに幕を開け、全国を巡回する。「震災から数年後の福島の海辺に建つ一軒家が舞台です。そこで自らつくった 3 体のピエロと暮らす彫刻家の女性と、ピアノでショパンのノクターンを弾く妹がいる。その家に男性がやって来ます。彼は津波で流された幼い娘を、砂浜で掘って探しています」「彼らを中心に織りなす重くて悲しい物語ですが、再生への希望も込めたつもりです。僕なりに風化を食い止めようと頑張って、仲間と一緒につくり上げた芝居です。観ていただけるとうれしいですね」　　倉本總さんの思いが心に響く言葉である。

(2015 年 1 月 14 日)